

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520638

研究課題名(和文) 日韓両言語学習者の呼称使用ストラテジーに対する容認性判断と性格特性の影響

研究課題名(英文) Influences of acceptability judgments and personality traits on the usage of address-terms for Japanese and Korean language learners.

研究代表者

林 ひょん情 (LIM, Hyunjung)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：30412290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本語と韓国語の第二言語学習者の呼称使用ストラテジーに対する母語話者の容認性判断を検証するとともに、容認性判断の評定に対して、評定者個人の性格特性がどのように影響しているかを明らかにすることである。研究の結果、非母語話者との接触場面では母語規範の転移や相手言語規範の逸脱だけでなく、学習者が相手に心配りを示す特定の呼称を過剰使用するケースが見られた。このような使用は、韓国人に比べて日本人がより顕著であった。また、学習者の相手言語規範の過剰使用について、母語話者は全体的に寛容的に判断していることが分かった。性格特性については部分的に影響が見られた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is verifying acceptability judgements of native speakers for usage of address-terms by Japanese and Korean language learners, and clarifying how individual personality traits influence those acceptability judgments. The results revealed that in the contact situation with non-native speakers, there were transfers of their native language norms and deviations from their target language norms, but also learners' overuse of the specific address-terms to show considerations toward others. The overuse is more apparent with Japanese learners than Korean learners. The results also indicated that native speakers judge the learners' overuse of their target language norms tolerantly. There were partially influences on personality traits.

研究分野：人文学

キーワード：日韓両言語学習者 呼称使用ストラテジー 容認性判断 性格特性

1. 研究開始当初の背景

(1) 日韓両言語の呼称使用ストラテジー

研究代表者は、これまで日本語と韓国語の母語話者を対象に、両言語の呼称選択に関わるポライトネス・ストラテジーの要因を検討し、日韓の呼称選択には、発話場面の負担の度合いに関係なく、親疎のような相手との「社会的距離」と目上目下のような相手との相対的「力関係」の要因が、両言語の呼称選択の丁寧度に強く影響する点では共通している。しかし日本語では相手との上下関係よりも親しいか親しくないかという親疎関係（相対的使い分け）が優先されるのに対し、韓国語では相手との年齢の上下関係（絶対的使い分け）がより優先されることを明らかにした(林・玉岡・宮岡・金, 2010; Tamaoka & Lim, et al., 2010)。

一方先輩に対する呼称使用の検討では、日本人大学生は、先輩に対しては実名を用いるのが一般的で、親族名称を用いることは適切でないと判断する傾向がある。これに対し韓国人大学生は、上下関係や発話の内容に関係なく、全体的に先輩に対しては親族名称を用いるのが一般的で、「親族名称」使用は相手との距離を縮めるための呼称として、「実名」はフォーマルな場面で相手と距離をおくための呼称として用いられる傾向が強いことが明らかになった(林・玉岡, 2009)。

林炫情・玉岡賀津雄 (2009) 「韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」と「実名」の使用に関する適切度を決める諸要因」『ことばの科学』22. 137-149

林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞 (2010) 「丁寧度判定で測定したポライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析」『日本文化學報』47. 101-115

Tamaoka, K., Lim, H.J., et al. (2010) Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*, 20. 23-45

(2) 日韓両言語学習者の呼称使用ストラテジーと容認性判断

非母語話者がかかわる接触場面では、言語知識の問題に限らず、文化的価値観や社会言語学的規範の相違、そして個人の心的、社会的距離のとらえ方の違いによって、ポライトネス・ストラテジー、すなわち円滑なコミュニケーションのために話者が相手に心配りを示す呼称選択が、逆に話し手の意図に反して相手に失礼になる場合もあれば、誤解を招く場合もある。日本語学習者の接触場面での規範適用を調査した加藤(2010)および代表者の日本人韓国語学習者と韓国人留学生を対象にした予備調査では、母語話者はコミュニケーションが成立していても、母語規範の転移や目標言語規範の逸脱だけではなく、学習者が相手に心配りを示す言語形式を過剰使用することに対しても違和感を覚えることが報告されている。つまり、第二言語学習者の目標言語規範の過剰使用に対して母語話者は否定的な評価をする場合も考えられる。

しかし、接触場面における韓国人日本語学習者(日本語学習者)と日本人韓国語学習者(韓国語学習者)の呼称使用ストラテジーや母語話者の受容度に焦点をあてた調査はまだ行われていない。そのため、どのような問題が、いかなる原因で起きており、そして日本人と韓国人にどのように受け止められているかについては未解明なところが多い。

学習者のより効果的なコミュニケーション能力の向上を考えるに当たっては、接触場面で日本語と韓国語の学習者によって用いられる呼称使用ストラテジーが、日本人と韓国人母語話者にどのように受け止められているかも明らかにすべき課題である。

そこで本研究では、接触場面での日本語と韓国語の学習者による呼称使用ストラテジーにおける母語規範の転移や目標言語規範の逸脱、目標言語規範の過剰使用を、日本人

と韓国人による容認性判断という観点から検討する。

加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション』 東海大学出版会

(3) 個人の性格特性が容認性判断の形成に及ぼす影響

良好な対人関係を維持するために、相手との親密さを保つための配慮または相手の感情を乱さないための配慮の仕方は社会的・文化的規範の相違のみならず、同じ母語規範を共有するなかであっても個人差がみられる。情動知能 (Emotional Intelligence: EI) を用いて、韓国人母語話者間の呼称使用の受容度と性格特性との関係を調べた林・玉岡の予備調査では、同じ社会的規範を共有する母語話者間であっても、先輩に対する親族名称と実名使用には、情動能力の違いが受容度に影響していることが示唆されている。以上の母語話者間における先行研究結果の示唆を受け、本研究では日本語と韓国語学習者の呼称使用ストラテジーの容認度を予測する個人の性格特性に、EI 指標を用いて検討する。

EI は自分や他者の感情状態がわかること、感情をコントロールできること、適切に表現できることに代表される感情を扱う個人の能力を意味するが (Mayer & Salovey, 1995) この情動能力は第二言語コミュニケーションにおける社会言語能力、つまり目標言語社会の社会的・文化的規範および状況に合わせて、適切に言語を使用する能力とも関連するものである。EI の測定には心理学の分野で信頼性と妥当性が検証された WLELS (Wong and Law EI Scale) を適用する。WLELS は 16 項目からなり、「自己情動評価 (Self-emotion Appraisal)」、「他者の情動評価 (Others-Emotions Appraisal)」、「情動の利用 (Use of Emotion)」、「情動の調整 (Regulation of Emotion)」に 4 項目ずつが対応している。容認性判断の評定に対

して評定者の情動能力の程度がどのような影響を及ぼすかについて検討する本研究では、ある特定の学習者の呼称使用ストラテジーを評定する際にも何らかの正の影響をもつことが予想される。

Mayer, J. D., & Salovey, P. (1995). *Emotional intelligence and the construction and regulation of feelings*. *Applied and Preventive Psychology*, 4, 197-208.

2. 研究の目的

本研究は、日本語と韓国語の第二言語学習者の呼称使用ストラテジーにおける母語話者の容認性判断に、個人の性格特性がどのように影響しているかを明らかにすることを目的とする。具体的には、(1) 日本語学習者と韓国語学習者の呼称使用ストラテジーの使用実態の把握、(2) 学習者の呼称使用のストラテジーに関する母語話者の容認性判断の測定、(3) 容認性判断の評定者個人の性格(情動能力 Emotional Intelligence: EI) が容認性判断に及ぼす影響の検証、の3つである。

3. 研究の方法

(1) 日本語と韓国語学習者の呼称使用ストラテジーに関するデータ収集、検討、選定

日本と韓国の大学で韓国語と日本語を第二言語として学習する中・上級の日本人大学生と韓国人大学生を対象にした日本語と韓国語学習者の呼称使用のストラテジーに関する質問紙調査を行った。質問紙では、親疎関係・上下関係・性別の組み合わせの異なる間柄を想定し、良好な人間関係を構築しながらコミュニケーションを達成していこうという場合に、学習者がそれぞれの相手に対してどのような呼称語を用いるのかについて、自由記入式による複数回答を求めた。そして、学習者の呼称使用に見られる母語規範の転移や目標言語規範の逸脱、目標言語規範の過剰使用などを、代表者のこれまでの研究成果

から得られた母語話者のデータと合わせて考察し、次の容認性判断調査で用いるデータを選定した。

(2) 容認性判断の測定と検討

日本語と韓国語学習者の呼称使用ストラテジーに関する容認度を測定し、それを容認性判断の基準とした。日本語と韓国語学習者の呼称使用ストラテジーに関する容認性判断は【表現自体はあるけれど、この相手に向かって(あるいはこの場面で)というのは適切だ/不適切だ】という判断である。容認性判断は「とても適切である(容認度: +2)」から「全く適切でない(容認度: -2)」の5段階とし、容認度がマイナスであれば否定的、プラスであれば肯定的であるという一般指標として使用した。

(3) 個人の性格特性・属性に関する測定尺度と分析

個人の性格特性の尺度(EI)は、それぞれ得点化するとともに、日本語と韓国語学習者の呼称使用ストラテジーの容認性判断(目的変数)を説明する予測変数として用いた。例えば、学習者による母語規範の転移や目標言語規範の逸脱、目標言語規範の過剰使用に対して、適切であると判断する傾向がある人はどのような性格と特性を持っている人なのかを判定した。また、呼称使用の受容度には個人の属性による個人差が見られるという報告(林・玉岡, 2004)を受け、容認性判断における評定者の属性(年齢・性別・相手母語に関する知識の有無・異文化接触頻度など)の影響も合わせて検討した。

林炫情・玉岡賀津雄(2004)「韓国の職場での呼称使用の適切性判断に及ぼす属性・対人関係特性・性格特性の影響」『広島経済大学研究論集』27(1).

4. 研究成果

日本語と韓国語の第二言語学習者の呼称使用ストラテジーにおける母語話者の容認性判断に個人の性格特性が及ぼす影響を検証する本研究の成果は下記の通りである。

接触場面における日本語と韓国語の第二言語学習者の呼称使用の実態を調査した結果、非母語話者との接触場面では母語規範の転移や相手言語規範の逸脱だけでなく、学習者が相手に心配りを示す特定の呼称を過剰使用するケースが見られた。このような使用は、韓国人に比べて日本人がより顕著であった。

また、接触場面での日本語と韓国語の学習者による呼称使用ストラテジーにおける母語規範の転移や相手言語規範の逸脱や過剰使用における母語話者の適切性判断では、日本人も韓国人も全体的に母語規範と照らし合わせて適切かどうかを判断する傾向が強いことが分かった。学習者の相手言語規範の過剰使用については全体的に慣用的に判断していた。

容認性判断に個人の性格特性がどのように影響を及ぼしているかについては、感情を扱う個人の能力を示す情動知能(EI)のうち、自己情動評価(Self-emotion Appraisal)と情動の利用(Use of Emotion)が比較的影響していることが分かった。しかし、全体的に決定係数の値があまり高くなく、EIで測定される呼称使用の容認性判断について十分に説明されたとは言いがたい。

今後は、「多次元的共感性尺度 MES」,「アサーティブコミュニケーション」,「コンフリクト・マネジメント」,「異文化適応力」,「NQ(Network Questions)」に関する性格特性尺度項目を含めての分析をも検討し、接触場面での非母語話者の呼称使用に対する母語話者の容認性判断に及ぼす性格特性の影響をより明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生 (2014). 大学教員間の「さん」と「先生」の呼称選択に影響する諸要因. *山口県立大学学術情報 (大学院論集)*, 7.9-15. (査読無)

齊藤信浩・玉岡賀津雄 (2014). 日本語母語話者による韓国語習得における語彙能力と読解の因果関係. *ことばの科学*, 28.111-123. (査読無)

黄郁蕾・玉岡賀津雄・エドアルドヴナ, プラーエヴァ マリア. (2014). 中国語母語話者の日本語学習によるポライトネスの構造と意識の変容検証 依頼に対する断り難さに着目して. *ことばの科学*, 28.51-69. (査読無)

林炫情・玉岡賀津雄 (2013). 呼称の容認性判断と情動知能(Emotional Intelligence: EI)の関係. *ことばの科学*, 26. 25-38. (査読無)

李在鎬・宮岡弥生・林炫情(2013). 学習者コーパスと言語テスト - 言語テストの得点と作文のテキスト情報量の関連性. *言語教育評価研究(AELE)*,3. 22-31. (査読有)

林炫情(2012). 韓国語学習者作文コーパスと韓国語教育(韓国語), 中国韓国語学習者コーパス構築と研究・学術研究会論集 1, 9-12 (査読無)

〔学会発表〕(計 8 件)

林炫情(発表決定). 日本人韓国語学習者の呼称使用を韓国人母語話者はどのように受け止めているのか: 接触場面での非母語話者の規範適用に対する母語話者の容認性判断. *韓国学研究会第 23 回研究発表会*. 2015.7.11(広島大学東千田キャンパス、広島)

木山幸子・玉岡賀津雄・Rinus Verdonschot (2012). 終助詞の感受性二関する個人差: 対人調整能力と性差の影響. *日本言語学会第 144 回大会*. 2012.6.16(東京外国語大学、東京)

〔図書〕(計 4 件)

林炫情 (2013). 『星座としての国際文化学』山口県立大学国際文化学部(編)のうち「異文化とコミュニケーションする」(pp.138 - 150)の執筆を担当.

玉岡賀津雄・高橋登(編)(2013). 『認知心理学ハンドブック』「言語」分野 20 項目を担当. 日本認知心理学会(有斐閣, 東京). また, 「メンタルレキシコン」「言語と性差」「談話」

の 3 項目の執筆担当.

玉岡賀津雄 (2012) 『研究社 日本語教育事典』近藤安月子・小森 和子(編)のうち「統計」(pp. 317-336), および小森和子・玉岡賀津雄で「学習者心理」(pp.81-94)の執筆を担当.

6. 研究組織

(1)研究代表者

林 炫情 (LIM HYUNJUNG)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号: 3 0 4 1 2 2 9 0

(2)研究分担者

玉岡 賀津雄 (TAMAOKA KATSUO)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・

教授

研究者番号: 7 0 2 2 7 2 6 3